

第4次葛飾区地域福祉活動計画 第2回作業委員会 議事要旨

開催日時	令和3年4月23日(火)午後2時00分～4時10分
開催場所	ウェルピアかつしか 1階 ひがほりめもりあるほーる
出席委員	小野委員長、佐藤副委員長、唯根委員、澤目委員、入澤委員、久保田委員、福田委員、朝倉委員、添田委員、田浦委員
配布資料	【資料1】第3次計画の成果と課題 【資料2①】ヒアリング調査概要と結果のまとめについて 【資料2②】葛飾区地域福祉調査集計調査(①小地域福祉活動調査) 【資料2③】葛飾区地域福祉調査集計結果(②地域福祉活動団体調査) 【資料3】葛飾区の現状 【資料3参考】葛飾区民における地域活動への参加状況や意識について 【資料4①】第4次葛飾区地域福祉活動計画 骨子(案) 【資料4②】基本方針について 【資料4参考】現行(第3次)葛飾区地域福祉活動計画 未記載事業について

1. 開会

委員長

前回の4カ月前の会議のときは、とても寒かったという印象がある。今日はとても良い天気になったけれど、緊急事態宣言も出るということで、マスクも取って話がしたいところだが、それもできない。もう少しそういう状況が続くだろうというときに、この会議に出席いただいたことに感謝する。

今日は、これまで皆さんにご協力いただいた調査について事務局から説明をいただく予定だ。ヒアリング調査でお話を聞かせていただき、ご協力いただいた方々に感謝を申し上げたい。また、その膨大なデータ分析に関わられた事務局の方々にも感謝している。

その調査の内容、そしてそれから見えてきた社会福祉協議会の事業も含めての提案もいただけると聞いている。皆さんからいただいた調査結果、活動計画をやってきた結果を情報としてお伝えしたあとに、皆さんがどうお考えになるかということ時間をかけてお伺いしたい。4時終了を予定しており、その点は厳守していきたいので、ご協力をお願いしたい。

まず、報告事項の(1)から(3)について事務局から説明をお願いしたい。

2. 議事

報告事項

事務局より、資料に基づき、第3次(現行)計画の成果と課題、調査報告、葛飾区の現状について説明があった。

委員長

資料1は第3次計画の成果と課題を社協でまとめたもの。資料2は、皆さんにご協力いただいたアンケートとヒアリング調査結果。資料3は区から出された資料である。これから、調査結果から見えてくる課題について皆さんからご意見をいただきたいが、その前に資料1の第3次計画の成果と課題につい

て、社協としては第3次計画のポイントは何だと考えているかを教えていただきたい。

事務局

重点事業として挙げている小地域活動の推進だ。昨年度はコロナウイルスの影響等でどの地区も事業がなかなか思うように展開できなかった部分はあるが、内容や頻度等は地区によってまちまちだけれども、それぞれの特性に応じたかたちでの活動ができている。社協としてもそれをサポートできているということで、これは大きな成果だと考えている。

委員長

事務局からは、それが資料1での成果だという話があった。では、資料2の小地域活動のヒアリング調査結果の5～6ページの部分でポイントになるのはどこか。

事務局

地域で少ないながらもつながりができているところと、社協と地域が密接につながってきているところだと思う。

委員長

数字から見えてきた課題、ヒアリングから見えてきた課題でポイントとなるのはどこか。できている、プラスの成果として受け止められるものは何か。

事務局

地域の課題も完全ではないけれども見えてきている。あとは、これまで関わってきていない方とのつながりが地域でもできているのではないかと思う。

委員長

小地域活動の集計結果（資料2②）の3ページの「成果」とされるところで、地域社会で小地域活動の必要性について「とても必要だ」、「必要だと思う」と言われる方が8割いる。やってきた中で、この活動が必要だと認識されている。これが先ほど言われた、つながるというところだ。では、課題は何か。

事務局

この活動自体をもっと広く知ってもらい、理解してもらおうという部分がまだまだではないか。関わっている方は十分に必要だと感じているが、地域の方にまだ浸透していないところが課題だ。やはり人材不足の部分はかなり大きいと感じている。

委員長

以上、今まで活動してきた中で社協の職員の方々が成果だと、そして実際に小地域活動をされてきた方々ができていること、課題だと感じていることを説明していただいた。これをどう受け止めたかを皆さんからお聞きしていきたい。

委員

小地域活動について少しお話ししたい。私たちの立石地区は小地域活動を始めてまだ日が浅いので、

成果をまだなかなか感じられていない。委員自身もどのようにやったらいいか、今いろいろ模索しているところだ。先ほど話があったように、地域の方にまだ小地域がどのような活動なのかが十分に知られていない。もっと周知する必要があると思っている。

私たちはまだサロン活動についてやっていないので、昨年11月に勉強会を行った。ほかの地区の方々のいろいろな意見を聞いて、いまさらながらこういうものなのだと知った。これからサロン活動をして地域にもっともっと根差した活動をしていけば、地域の方に理解していただけるのではないかな。そのためには委員自身ももっと勉強して、ほかの地区の方々の活動を知ることも必要だと感じている。

委員長

地域の方に理解されていないと感じたのはどのような場面か。

委員

今、民生委員と社会福祉協議会の方と連合町会の三者でまとまってやるという活動が基本だと思うが、まだまだ連合町会の方の理解が進んでいないので、これからは町会の方の理解を深めるように町会の会合に出ていろいろお話をしていきたい。町会も高齢化が進んでおり、こちらの活動まで回せると思っていないという感じもしている。民生委員だけでやっている活動ではないかと思われているふしもあるので、もっと皆さんで協力してやっていきたい。社会福祉協議会の方には、私たちは知識がないのでいろいろ教えていただいて助かっている。

委員長

活動者の不足ということが出てきた。理解されていないという場面も出てきた。

委員

私たちの周知活動も不足しているのかなと思っている。

委員長

なかなかその理解が進んでいかないというところが改善されていない。

委員

そうだ。

副委員長

亀有花風船の会の副委員長を務めている。小地域福祉活動は丸6年経過して、今年7年目に入って、少しマンネリ感が出てきて、どのように進めたら会員が大勢来てもらえるのか、喜んでもらえるのか。私たち委員自身がもう少し新たな知識を習得すべく勉強をしなければいけないのではないかなという気がしている。

前回の第1回作業委員会に出席して、いろいろな人たちの日常の動きをお聞きして、自分の知らないことがたくさんあって非常に参考になった。それはとても大事なことではないか。この中にも、(2)「ボランティア活動推進」の中で、「ボランティアやNPOと更なる連携を進めたボランティアまつりの開催が求められている」と書かれているが、このとおりだと思う。区内で19地区の小地域活動をやっている。それ以外にも違うところでいろいろなボランティアの人たちが活動している。同じ福祉の活動にも関わ

らず、ほとんど横の連絡というか、何をやっているのかを知らない者同士だ。私はこういう「ボランティアまつり」が開催されたら、ぜひ参加させていただいて新しい知識をどん欲に吸収して学び、それをまた自分の地域の福祉活動に生かしていきたい。ぜひボランティアに関わる団体が大勢集まって交流できる場所があったらよいという印象を持った。

委員長

知らないことがたくさんある。実際にこのヒアリングの結果あるいは調査の結果を見て、何か気になったことはあったか。

副委員長

亀有花風船の会の副委員長の私と町連の会長である委員長の2人と社協のスタッフ、小野先生を交えて、このヒアリングが行われた。私は小地域のことを話題にして、町連の会長は町会活動の難しさを盛んにお話しされた。ちょっとお互いに違うスタンスで話していたような印象を持った。澤目委員のお話にもあったように、どうしても民生委員が主体的な行動、先頭に立ち、町連の人たちは後ろから眺めているというスタンスで、おそらくどの地域も似たような動きではないか。しかし、これはやむを得ない、失礼ながら町連の人たちは高齢で斬新なアイデアをあまり期待できない、行動力も無理だろうということで、お願いできる役割というのは、トップに立って組織のかなめとしていただくこと。あるいは、資金面での協力というかたちになるだろう。

委員長

斬新なアイデアについては議論していかなければいけないが、いろいろな人たちがつながることで違うアイデアが出てくる。そういうことを期待したいということだ。

委員

私は金町地区で地域福祉活動の委員をしている。小地域福祉活動を始めるまでは自分の住んでいるところの町会長とはよくお話しして親しかったが、ほかの地区の方とはお話しすることはめったになかった。この小地域福祉活動が始まって7年になるが、とても風通しが良くなった。私は民生委員の会長をしてほかの町会選出の民生委員からいろいろと相談を受けて、そのときに民生委員だけで解決できないことがたくさんある。町会長も含めて相談することがあるが、そういうときに話しやすくなった。特に連合町会長も協力的で、小地域には5人程度の委員をしている方が毎回必ず出てくれる。民生委員も5、6人出るが、当番制をしていないけれども一般の民生委員も10数名必ず来てくれる。

私たちは毎月1回のサロンをやっていて、皆さんがとても楽しみにしてくれている。お茶飲み会をやっていて、それは昨年からコロナでできなくなったが、いろいろな作品作りを通して地域の皆さんとつながるということをしてきた。地域の方もそれをすごく楽しみにしてくれていて、いつからまた始まるのかという声をよく聞いている。金町地区は昨年も本当に緊急事態宣言のときは休んだけれども、夏ぐらいから12月まで毎月やっていた。それで1月から3月まで休んで4月からまた始めた。今度はどうかなと心配している。金町地区は広くて、1箇所で行っているのも本当に一部の人にしか来ていただけないという気持ちがある。ここにもあるように、いろいろな拠点で小さなサロンがどんどんできればよいと思っているが、そうなってしまうと人材確保が難しい。そこをどう考えていったらいいのか。

この作業委員会で Learning For All の方と知り合って、社協から話があって昨年の12月にフードパントリーのお手伝いをした。今回、その担当の方から、この団体は学習支援をしていて、今年中学を卒

業した人のことで相談を受けた。明日、主任児童委員を含めて一緒に話をする事になっている。初めてそういうNPOの方とのつながりができて、子どものことで学校以外でのつながりがないので、今回お手伝いできればと思っている。

委員長

いろいろなつながりができている。この作業委員会を通してのつながりもできた。やはり地域を超えてのつながりもある。ヒアリングの結果で、地域の住民とのつながりができたという評価がある。それもあるけれど、この小地域活動をやることによって地域を超えてのつながりもできた。

委員

このアンケートについて社会福祉協議会の方に感謝している。これだけの数を取りそろえるのは本当に大変なことだったと思う。ただ、こういうふうにしてデータがあると実りのある会話ができると思う。先ほど「つながり」という話が出た。佐藤副委員長からNPOとの連携という話もあり、今もフードパントリーの連携の話もあった。こちらがよりもっと前に進むとよいと思っている。我々Learning For Allは2010年から葛飾区で活動しているが、地域の方との連携、接触の機会が少ないと思っている。活動場所が地区センターしかないということもあり、地区センターに行ったときに活動している団体名がホワイトボードに書いてあるということではしか知る機会がない。地域の中にいろいろな思いを持って活動している方がたくさんいるにも関わらず連携することができず、支援の手を必要としている人たちに支援が届かない状態になっていることは非常にもったいないと思っている。

今回のアンケートにも、活動場所で新しいものを考えていくではないかとあったけれども、そちらに非常に大きな期待をしている。より敷居が低く、人と人が出会って、そして新たな連携が生まれていくような場所が増えれば、きっとより良い支援が行われていくのではないかとと思っている。

委員長

拠点が無いということには共感するか。

委員

それについては共感する。やはり支援が必要な人は交通弱者であることも多く、活動の場所が多ければ多いほどよい。ここに支援の場所があれば、この人が通えるのにとすることは多々ある。

委員長

今までの経験から、それはどのぐらいの範囲なのか。

委員

我々は子どもを対象にしているNPOなので、年齢によっても状況によっても変わってくる。例えば小学校低学年の場合、行動範囲が狭い。学校からも小学校の学区からあまり出ないようにも言われている。学区単位になる。やはり1小学校区、1中学校区に1つというのが理想だと思っている。高い要望とは思いますが、実際にはそのぐらいの活動範囲だと思う。

委員長

この調査結果からもつながりが大切ということは見えてくる。そのつながりをつくっていくためには

拠点は非常に大きなツール、方法になる。拠点を つくること自体が目的ではない。

委員

拠点づくりはツールだ。もちろん場だけでは人と人はつながることはできないと 思っていて、つなげる人もまた重要だ。今回、社協の皆さんのお計らいでフードパントリーで連携できる ようになったが、やはりそういうことをしてくれる方がいるかいなかで、連携が大き く進むかどうかが変わると思っ ている。

委員長

調査結果を見て、どのように考えているかをもう少し伺いたい。

委員

一昨日、社協から引き継いで葛飾総合高校の授業をやっている。この地域福祉活動 というのはまさしく該当しているところだ。実は昨年コロナが発生してから小地域福祉活動が できなくなっているという現状がある。昨年は行き当たりばったりというかたちで何とか 切り抜けたが、今年はまだ時間があるのでどうしようかと考えているところだ。むしろ こういうところの活動を利用して、もちろん学校との打ち合わせが必要で、授業なので 生徒を外に出すのは難しいところもある。しかし、授業で生徒たちにボランティアをやった ことがあるかと聞いたら、ほとんどの子が手を挙げた。実はそのぐらいボランティア活動 をしている。ただ、子ども、子どもたちがボランティア活動に出てきていないし、子育て 中の年齢の人たちも出てきていない。ボランティアをやりたい、必要だということは皆 さんがしっかりと声を上げている。ただ、今は社協が出しているお知らせを見せても、何 をやっているのかわからない、どのぐらいの年齢層なのかと考えてしまう。知っている ところに飛び込むのは行きやすいかもしれないが、資料だけだと行きにくさがある。あと、 継続しなければいけないのではないかと、足踏みをしてしまう原因ではないかと思う。

それと、人材の必要性、人材不足と言われるが、何が人材不足なのか全然わからない。 一概に高齢化していると言うが、お祭りをやりたいので若い人が欲しいとなったら、 単発であれば「うちのお父さんを出そうか」となる可能性は大いにある。誰もやりたく ないわけではなくて、やってみたいけれど、変に手を挙げてしまうとそれ以上にもっと 違うことになってしまうのではないかという不安があると思う。特に若い世代で働いて いる、子育て中となると、大きな荷物を負わされてしまうことが非常に負担になる。そこ を小分けにして、例えばおみこしを担いでくれないかという話だったら、もっと受けやす いのではないか。

委員長

人材不足と言うけれども活動している人たちはいる。ただ、その人たちを新たな活動につ ながっていくためにはいろいろなメニューがなければいけない。

委員

もっと具体的に出していくことによって、こういう人材が欲しいとなったら、特に単発 であれば、「だったらやってもいい、自分の地域だったら参加してもいいよ」と。例えば側溝 の掃除だと力仕事になるわけで、若い3、40代のお父さんだったら、そんなことは訳なく できる。本当に1年に1回ぐらいだったらやってもいいよとなる可能性もあると思う。

委員長

ここで言う人材不足、人手が足りないというのは、実はそうではないのではないかという意見だ。

委員

具体的に人手が欲しい内容を出していくことによって選択しやすさが出るのではないか。それぞれにどうやって届けるのかが問題ではないかと感じている。

委員長

人材不足については、実は活動のメニューが揃ってくればやりたいという人たちはいるのではないかとということだ。

委員

私は自宅でサロンを開いていて、この1年間は何もできないような時期だったが、何とかやっていきたいと思っている。先ほど佐藤副委員長が言われた町会と民生委員の話、私も長いこと民生委員をしていたのでわかるが、なかなか難しい。頭に立ちたい方が多いように思う。少しずつみんなが譲り合ったら違う方向に行くのかなと思うことはたくさんあった。少しずつ世代交代をすることも大事ではないか。若い人たちの力を借りためには少しずつ世代交代をしていったらよいと自分の町会でも思うし、自分自身も交代の時期に来ていると思っている。後ろに行っても手伝えることはあると思うし、頭にいることなく、平たく人材として自分のできることをやっていけるようになったらよいのではないかと思う。

副委員長

第1回作業委員会に出たときに、今日お休みの森谷さんと名刺交換をさせていただいた。森谷さんは、私の亀有地区でフードバンクや子ども食堂、子どもの居場所づくり、そういった活動をしていらっしゃる。「地元じゃん」ということで足を運んで、何かお手伝いすることがあるかと言ったら大歓迎された。私も普段は頭に立って動いているけれど、森谷さんの元では一兵卒として活動している。森谷さんたち、大変若い世代の人たちがSNSを駆使して母子家庭の人たちとの輪をつくっている。そういうことは私たちの世代には無理だなと感心することしきりだった。私たちは森谷さんの手足となって動く。民生委員も、私たちが小地域活動としてやっている花風船の会は曜日や時間が合わなくて参加できない委員が半数いる。26名のうちだいたい10名から15名ぐらいが参加できている。森谷さんのお手伝いには、花風船の会に参加できない人が参加できるということで、フードバンクや子ども食堂に応援に来てくれる。私にとってはとてもありがたいことで、この会議のおかげだ。そこで先ほどのような話になって、いろいろな人たちとの交流の場があるとよい、いろいろな話が聞けたらよいという印象を持っている。

委員

私もそう思う。横に並ぶということはすごく大事で、人を知ることでもまた違う発展があると思っている。今、私のサロンはとても行き詰っている。やりたくてもできない。狭いところなので、どうやって安全にやっていったらいいのかということとどこかで教えてくれないかと思っている。自分でやれることは、仕切り板を置いたり、消毒したりしているが、やはりお茶飲みが主体で、そしてしゃべりたくて見える方が多い。それで年寄りだということになるとダメなのかな。とにかくワクチンが打てて、一つ波が越せたら始めようと思っている。

委員

今お話を伺っていて、私はこの作業委員会に出席していろいろな活動をしている方がこんなに大勢いるのだということを初めて知った。今、私は民生委員として活動しているけれど、地域にどういう方がいるのかと思うと、申し訳ないが、わからない状況だ。いろいろな方と知り合ってみたいという気持ちが出てきた。小地域活動では、これから若い方も一緒に活動していただきたいという気持ちがすごくある。町会も民生委員も高齢化しており、若い方の力を借りたいという気持ちだ。

委員長

若い方とつながりはあるか。

委員

やはり若い人の力がなければやっていけないことは事実だ。若い人の考えも取り入れながらやっていけたらうれしいと思っている。

委員

私たちも高齢化しているので考えが固まってしまうこともある。若い方の考えも入れて、どちらを選ぶということではないけれど、両方でいろいろ考え合って活動ができればよい。

委員

小地域福祉活動で言えば、普段のサロンは平日の午後で高齢の方の参加が多い。年に1度、サロンコンサートを開いている。昨年度は落語会をしたら、高齢者ばかりでなくて、チラシや掲示板で見たということで若いカップルも来てくれて、こんな若い方たちも興味を持って来てくれると思った。そのときに社協の方が活動の宣伝もしてくれて、落語を聞きに来た方も、地域ではこういう福祉活動をしている団体がある、この団体はそういうことをしているのだということを知っていただいて、よかったなと思った。

今回 Learning For All の方とつながりができて、フードバンクのお手伝いだけだったけれども、そこの方が私たちが民生委員なので相談してみようと思って声を掛けてくれたことがとてもうれしかった。その方とは地区が違うので、これからどういうふうにその方とご家族を支えていくのかは、18歳までの児童を専門に見る主任児童委員に明日つなげていく。その人たちは地域も超えて知っていて、そういうつながりで東京都の施策も教えてあげたりして、私たちの知っていることはそちらに伝える、私たちの知らない新しいことはNPOの若い方から教えてもらう。これからはそういうつながりでやっていけたらよいと期待している。

委員長

今回のアンケートでも、人がいない、人材不足という言葉がキーワードとして出ている。ただ、今のお話を聞いているとそれだけでもなさそうだ。

委員

いろいろなことをやっている人がたくさんいるが、知らない。私たちも知らないし、向こうも民生委員が何をしているのかがわからない。学校の先生も民生委員をよく知らないという方がたくさんいる。どうしたらわかっていただけるのかと思っている。

委員

「知らない」という言葉がキーワードとして出てきたが、本当に同じ感想を持っている。地域の中で活動を始めて数年経つが、地域の中で民生児童委員がどのような活動をしているのか、誰なのかがわからなかった。活動していると青少年委員という別の委員がいらっしやる。その人は民生児童委員とはどう違うのか。それもわからなかった。地域の中で動いている方はたくさんいるのだけれども、どういう役割でどういう責任で権限、誰なのかということがどうしてもわかりにくい。それは自治体ごとに少しずつ違っているような気がする。やはり地域の中に足を一步二歩と踏み込んでいって初めてわかることが多々あると思っている。その一步二歩踏み込むことはなかなか難しいことで、それを知るまでのハードルが少しでも低くなると、きっとできることはたくさんあるのではないかと思っている。

委員長

お互いに知り合うことも必要だ。

委員

知らないところに飛び込む不安は大きいと思う。つながる切っ掛けがあると皆さん足を運んでくれたりする。私は葛飾に住んでいないが、うちのマンションで子どものためのクリスマスでサンタクロースを登場させた。子どもたちが対象となるので、そこにお父さんお母さんが一緒に出てくる。例えば、机の準備が必要だとすると、そこに来た人たちが「やりましょうか」と言って、ボランティアとして来てもらったわけではないのに参加してくれる。特に小さい地域だとそういう動きが可能ではないか。

委員長

やはり小さい地域は必要か。

委員

そう思う。それと、先ほど言い忘れたが、私は障がい者の方の支援をしていて、障がい者の方でボランティアをやりたい方が結構いらっしやるが、日中の活動先として大人数でいるところが苦手という人たちも非常に多い。精神の方たちは特にそうだ。しかし、実際は何か活動をしたい、社会参加したいと思っているても、なかなかそういう場がない。お願いしても「精神の人はちょっと」と断られてしまう。体をつくるためにスポーツセンターを使おうということで、最初は一緒に行き行って器具の使い方を習っても、そのあとに一人で来られたら困ると言われて断られてしまう。地域福祉の中でやっていただけるものがあれば、もちろんその方の特性をお伝えすることはできるので、その中で関わりを持っていただくと、その方自身も地域の中で暮らしていけるようになる。皆さん疎外されてしまっているような状況が起こっているので、できたら一緒に抱え込んでいってもらいたい。もともと案としては障がい者の方も地域福祉法の中にはあるので、同じように考えていただきたい。

委員長

地域にいろいろな方々がいて、その方たちとつながっていくことが必要だ。しかも、小さなエリアでということだ。久保田さん、若い方々とのつながりは実際にあるか。

委員

ない。それは、子育てをした地域が違うということがものすごく大きいように思う。私は、このちょ

っと先の宝木塚小学校に子どもたちを通わせたが、私が今住んでいるのは私が生まれたところだ。この子どもを育てたときの親の交流はかなり強いと思う。それで、私は何となくいつも浮いている感じだ。だけでも、最後まで自分が住んでいるところで安全に生活して終わりたい。お年寄りもだいたい同じぐらいの年齢だけでも、間のお母さんたち、4、50代の子育てをした人たちとは全く縁がない。そうするとなかなかつながらない。民生委員のおばさんは民生委員のおばさんだけでも、そこまでだ。これは私自身の問題なのか、難しいと思っている。

委員長

この計画をやってきて、小地域活動を重点的にやってきて、社協としての成果もある。しかも小地域活動をやっている方々も必要性を感じている。ただ、課題もある。そこに共感する方々もいる。やはり人手の問題は大きな問題かもしれない。ただ、人の問題といっても、やっていて風通しも良くなってきている。あるいは、斬新なアイデアができないというところは、それだったらどうすればいいのかというときにほかの人とつながってみると、実は斬新なアイデアも出てきて、今までの地域の中での活動自体も変わってくるかもしれない。それらは今までの調査から見えてきたところだ。それと、皆さんが活動してきてつながることもできたという評価もあるし、活動の成果も出てきた。でも、どうしていいかというところもまだあるという状況だ。自分たちだけでやろうとしても難しくても、地域を超えていくいろいろな見えてくるものもある。それはこの成果として見えてきたものかもしれない。あと、民生委員が前で町会が後ろという印象は非常に率直な意見で、どうするのかも考えなければいけない。今までであった地域の活動者だけでは難しくなっているけれど、新しい方々とつながっていくことによって違うものが生まれてくるかもしれない。それはこの4年間で成果として見えてきたところではないか。今度はそのときの活動の拠点、エリアとなると「小さな地域」というキーワード。つまり、今まで活動をやってきたけれど、どうもそのエリアでは難しいぞというところは調査結果でも出てきているところで共感される方も多かった。

委員

人とのつながりという意味では、民生委員との関係は福祉部がメインでやっていて、青少年委員は教育委員会、町会全体の話だと地域振興部になる。行政のほうの縦割りの発想でなかなか人と人とのつながりがうまくいっていないというところも、もしかしたらあるのかなというのが率直な感想だ。そこはすぐには何とも言えないところで、現状としてはそういうところもあるのではないかとお話を聞いていて思った。

委員長

その縦を横にしていけるのは地域なのかもしれない。それを社協としてはどのように感じているのか。

事務局

社協からすると、葛飾区の福祉計画にあるCSW（コミュニティ・ソーシャル・ワーカー）、地域福祉コーディネーターという名称のものが、つなげるとかつなぐという仕掛けをされているのではないかと感じている。実際に皆さんのお話、あと直接お会いしてお話を聞かせていただいたという部分では、課題はみんな何となくわかっていて、この課題をどこに届けば聞いてくれる、受け止めてくれる、つなげたり改善してくれたり、解決に導いてくれるのかということところが知らない、わからないと思っているのではないか。社協の私たちも、私だけかもしれないけど、自分たちの使命なり機能はわかっ

ているが、実際に地域に入ったときに自分たちの立ち位置はどこまでやってよいのか、どこまで皆さんと一緒にやっていってよいのかというところでわからない部分がある。ただ、それがだんだん薄れてきているのが、十数年小地域福祉活動をやって地域の人たちと一緒に、最初はけんかしながら、徐々に笑えたり、一緒に喜んだり悲しんだりということを実感できるようになってきたので、そういうところで地域の方々が社協に対する役割や機能を知ってきてくれた。

特に私が小地域にいたときには、うちの近くで認知症の方がぐるぐるうちの周りを回っているという通報の電話をいただいて、すぐに私が行って30分ぐらい一緒に歩いてみた。地域、町会とか民生委員の人と顔がわかる、名前がわかる関係になってくると徐々にいろいろな相談事が入ってくるという状況になってきた。皆さんがおっしゃるとおり、知らないということが一番不安につながってしまうと感じている。顔と名前がわかれば、立石については澤目さんに聞いてみよう。この間、澤目さんのところに伺ったときに、今回のヒアリングでも書いてあったようにお子さんとの問題があったという話があった。そういうことが、実はねということで、唯根さん、佐藤さんのところでもお話ができる。顔がわかるような関係づくりはすごく大事だと思っている。社協は19地区に1人は必ず担当職員がいるから、その担当者も地区の中で顔と名前がわかるようになってきている。徐々にであるけれど、地域の状況を社協の一人ひとりがわかってきて、これを受け止めてどうするかという次の段階に来ているのではないかと実感している。

委員長

社協としては環境はつくることができた。

事務局

そう思う。

委員長

その次の段階に入っているというところで、どうつながっていくのかという具体的な活動が必要になってくる。そこには人と人が顔を合わせるが必要になってくると感じている。

委員

小地域福祉活動は立ち上がってから13年になる。最初はモデル事業から始めて、あとは社協の役員から始めましょうということで半ば強引にお願いして、こういう活動をやらせようという話で始めた。そういうことで、地域の皆さんの中に「やらされている感」が残るのではないかとすごく心配した。しかし、今回のヒアリングやアンケート結果を見て、自分たちのまちは自分たちで良くしていこうという意識で活動を続けていただいて、本当にやってきてよかったなというのが率直なところだ。職員一人ひとりが各地区を担当する中で地域の皆さんと一緒に活動して、これほど必要なものだと思うてくれているのは何よりだと思った。こういう機会もそうで、この場を通していろいろな主体同士がつながるとか、そういうつながりができたということも一つの成果だと思う。

福田委員の意見を聞いてヒントになったことがある。とにかく人材育成、人材不足ということがずっと言われてきたが、新たな人材を発掘していくのか、あるいは今ある人同士がつながることによって人材不足を補っていくのか。また、この2つを組み合わせることによって、お互いに補完し合いつつ、新たな人材を発掘していけると思った。単発の活動を始めてはどうかということで、いろいろな団体は、例えば町会の会員になっていただいて、そのまま会の運営を将来的に担ってくれるような人を求めている

と思うが、最初の取り掛かりとしては、まずイベントのボランティア、イベントをお手伝いしてくれる人、そういう募集から始めて徐々に活動してもらおう。そういうことが効果的ではないかと感じた。団体同士をつなげる人、そういう活動を紹介するような人、いわゆるコーディネーターみたいなものを今いる社協の職員全員ができるように取り組んでいければよいかと思った。

委員

この活動は区民主体の活動で、私は事務局として参加している。多くのところでサロン活動、イベント、講座もしくは勉強会ということでやっていただいている。いずれも多くの方が参加して賑わっている。そのこと自体はつながりの第一歩としては成果があると思っている。特にその中でも事業として非常に盛んになっているところには、まず数名の熱心にやっていただくキーパーソンがいらっしゃる。イベントやサロン活動において折り紙教室とか素人落語、健康教室で地域の資源を活用してうまく活動しているところもある。活動している方自身も非常に楽しんでいるのも盛況でやっているところかと思っている。思い付きの部分だけでも、維持発展をしていく上で、別の世代でも楽しめるもの、その世代がキーパーソンとなれるようなイベントがあればよいのではないか。地域の資源としてそこで何か活動している、取り組んでいるような若い人というか次の世代がいれば、そういう人たちに一部バトンタッチしていく部分が必要なのではないか。

委員長

「第一歩」という言葉が出た。この5年間の成果としては、活動の担い手や参加者の増加促進という言葉が出ている。そのコアになる方が見えてきたのかな。最初は「やらされ感」もあったところから、でも違うのではないか。やはりこの地域を変えていかないと、もっとたくさん問題が出てくるかもしれない。あるいは、場合によってはこの地域活動は面白そうだ、楽しそうだと思う方々も出てきている。ただ、その方々とまだつながっていないというところはこの先の課題ということが、我々の共通認識でよいのではないか。そのためには戦略が必要で、その戦略のためにも今ある既存の地域のエリアにとらわれてはいけないという状況もあるらしい。「小さな地域」がもう1つのキーワードとして出てきた。もう1つ、いろいろな人たちがいるということだ。その人たちとその「小さなエリア」でつながっていく。実際につながってみると、唯根委員が言われたように新たなものが生まれてくると感じた。実際にこの4カ月で事務局の方、皆さんにご協力いただきながら、この活動計画がいかなるものだったかというところが数字と文字で出てきた。その実態についてのご意見を伺って、共通認識ができたのではないかと感じている。

協議事項

事務局より、資料に基づき、第4次計画「骨子」(案)について説明があった。

委員長

時間があと10分ほどになってきたが、今まで皆さんから出された課題と今回新たな事業として位置づけられているものも含めて、ここを直したほうがいいのか、あるいはここはもっと強化してほしいとか、とても良い事業だということもあるかもしれない。お一人1分、2分でご意見をいただきたい。

委員

資料1「第3次計画の成果と課題」で、「自分らしく安心して暮らせるまちをつくります」とある。小地域活動もそうで、私のような小さな場所でやっているものも、やはり安心して暮らせるために私が始めたことなので、ぜひこれを協力してやっていただけるとありがたい。

委員

私たちもこれからどうしたらいいのかがなかなかわからない状況でスタートした。今、皆さんの話をいろいろ聞いて、これから頑張っていかなければならないと思っている。私たちだけが頑張ってもなかなかできるものではないので、NPOの方、町会の方、社会福祉協議会の方、皆さんのお力を借りて、これからやっていきたいと思っている。いろいろ課題も出てくると思うが、一つ一つみんなで考えながら進めたいと思っている。

委員

久保田さんのサロンのようなものが本当にそれぞれの地区にたくさんできたら、私も今後この地域、金町ですとそこで皆さんとつながりながら終われる。みんながそう思えるようなまちにしていきたいと思っている。だから、今の小地域福祉活動はそのようになるまでの準備段階ではないかと思っている。私は久保田さんのサロンが理想だ。

委員長

小さな地域で。今、準備段階というのはそうかもしれない、この先のためにということだ。

委員

私はそう思っている。

委員

本日お話を伺っていて、社協の皆さん、地域の皆さんが進めていた小地域福祉活動は素晴らしい活動だと改めて思った。ただ、始めた10年前とは時代が変わってきていることが大事なポイントだ。地域の中に今までよりも多様な人がいる。そういう人たち同士が出会えないまま過ごしてしまっている。そして、地域の中での課題が眠った状態になってしまっているというところが何とかしないといけない状況だと思っている。みんなが楽しく幸せに暮らせる地域をつくっていくためにも、今の時代にどういう地域の姿が求められるのだろうかというところから、地域の人たちが対話できる場、機会をつくっていくことが大事だと思っている。今回、新規事業で出てきている「居場所づくり事業」は、そういう課題解決の第一歩だと思っている。課題解決のスピードの速さに頭が下がる思いだ。ただ、これだけですべてが解決するわけではないと思っている。例えば現行計画の中での「ボランティアまつり」とか、地域の活動する人が出会う機会はあると思うけれども、より多くの人に参加できるように、そして対話できるように変えていく、機会を増やしていくこともできるとよい。

委員長

居場所づくりは一つのツールであって目的ではない。目的は、そこにその地域の人たちが集まってきてつながり合っていくことだ。そして、いろいろな問題を解決していく。

委員

あと、1点、地域福祉活動計画と対になっている地域福祉計画も重要で、それが双方向的に補いながら一体的に進んでいくことが計画のあり方だと思う。そこにある、先ほど事務局からもあったコミュニティ・ソーシャル・ワーカーのような立場の方の動きも非常に重要だと思うので、そういうところに期待している。

委員長

つながるためにはつなげる人も必要になってくる。そのつなげる人が、いわゆるコミュニティ・ソーシャル・ワーカーという言葉になるのかもしれないが、そういう人たちが社協にいらっしゃる。その居場所の中につなげる人がいることをこの先の計画で載せていけるとよい。

委員

そうだ。

委員

この活動計画を見て本当に必要なことだと感じている。居場所づくりがどのようなかたちで進むのか。それと、ボランティアの「NPO・地域貢献活動団体支援」がどのようなかたちで進むのか。簡単に説明してほしい。

事務局

まず居場所づくり事業は、区から施設を借りて、そこでサロン活動や健康講座、子ども食堂、そういう地域の方が気軽に集える場を展開していきたい。地元の町会あるいはNPO法人の方、ボランティア団体といった方々にいろいろな活動をそこで展開してもらうことによって地域の方がたくさん来てくれる。そういう居場所づくり事業を考えている。そこでいろいろな団体が顔を合わせることによって、またつながりが生まれて、それぞれの活動が活性化していけばよいと思っている。

小野委員長

そのような案である。この活動計画でも出てきている今までの課題も含めて、今は「骨」をつくっているわけで、それに基づいて肉付けしていくときにどのような活動がいいかということも議論していければよい。

事務局

NPO・地域貢献活動支援については、社協では既にこの事業を行っている。具体的にはNPO活動を始めたいという団体から相談を受けて、具体的にどういう手順で進めたらよいかという話をする。あるいは、既にNPOとして活動している団体でも、法に基づいたかたちでの報告義務、団体運営についての悩みや問題点などに対して、弁護士や司法書士あるいは社会保険労務士などの専門職とつないで問題解決に導く。あるいは、地域で活動している団体に対して、例えばボランティアまつりなどの情報交換の機会の開催を行っている。

委員

前にお話ししたように、活動していても、なかなかそれを広げることができない。役所から認められ

た団体でないとダメだということですごく縛りがある。あるいは、教育委員会の許可が必要だとか、いろいろなことがある。だから、地域として活動ができるもの、それは社協しかできないところだと思うので、その中にぜひ入れていただくと助かる。

副委員長

私は小地域福祉活動を展開していくにあたって、社協の皆さんには毎回とても助けていただいて感謝している。資金的な面も十分な助成金をいただいている。ただ、いろいろな地域の福祉活動を知っているスタッフの皆さんから私たちに対してもっと積極的な提案、アドバイスがいただければありがたい。フォローだけではなくて、そういうこともお手伝いいただきたい。

委員長

2時間ほどいろいろご意見をいただいてきた。ここで常務から一言いただきたい。

常務

お伺いして、私たちが課題だと感じていることが今日の議論の中でも出ていたという気がした。先ほど縦割りであったが、あらゆる組織が行政も縦割りで地域も縦割りになっている。そういうことの中で我々、社会福祉協議会は協議会という名前が付いているように、地域の中でいろいろな団体が顔合わせのできるようなプラットフォームをつくることをしなければいけない。ただ、このプラットフォームについても、葛飾区の場合、例えば子育てについては子育て支援部で1つのプラットフォーム、地域協議会がつくってある。行政に任せているとどうしても事務局ごとにつくってしまう。我々は法人の地域ネットワークをつくって55法人に参加してもらっている。これは社会福祉法人のネットワークで始めているが、将来的にはNPO法人にも入ってもらって、そこで協議ができるように仕組み、プラットフォームがつくられていくことが重要だと思っている。

先ほど説明があった居場所づくり、私の居場所というのは、男で言えば赤ちょうちんみたいなものだ。地域の中に入ってきて、赤ちょうちんに一杯飲みに行く人はみんな顔見知りになって、そこでいろいろな話があって、今度あれやってみようか、これやってみようかみたいな。だから、居場所なんかも、やはりあそこに行けばいつも誰かがいる、あの人がいるというような場所みたいなものができて、その中で顔を合わせていろいろな話ができる。あるいは、そこでいろいろな行事をやる。今は場所を貸してくれるという仕組み、居場所づくり事業で例えば都営住宅の集会場を無料で東京都が貸すと言っている。だから、利用しようと思えば場所はある。ただ、それが持続可能なものとしてやるようにするためには、どうしてもお金をかけずに、そこでやっている人たちがお客様ではなくて運営する側が楽しくやっているという仕組みにしていかなければいけない。今回の居場所づくりは区から施設を借りてやって試行的にいろいろなことを試して、全区的に広めていくときにどこの地域でもこういうかたちならできるといふものを、実験的に1つのモデル的なものをつくっていったらよい。さまざまな地域で活動している人たちがその場に来て、いろいろな企画を出していただいて、実験的にやってみることがやれたらよいと思っている。

先ほど佐藤副委員長から出たが、落語をNPOとしてやっていく団体とコラボを組んで、小地域福祉活動の中の演目として参加してもらおう。地縁を基礎にして活動している町会や民生委員、ある目的をもってやっているNPOやボランティア、そこをどう結び付けていくかということでは、そういうかたちものに入ってきてもらってということによって接点をつくっていくこともあるのではないかと。この地域福祉計画の4年間で、小地域福祉活動が19地区の中である程度できるようになってきた。今後は、今言われ

たような活動の中に専門性を持ったNPOの活動とコラボしながら展開していくことを課題として考えていかなければならないと思っている。

今日この作業委員会を聞いていたら、皆さんが同じような考え方、課題を感じていることがわかったので、そういうことを何とか解決できる方策をこれからまたここで考えていけたらよいと思った。

委員長

この先、作業委員会では「骨」に肉付けしていく作業が出てくる。そのときに共通認識をつくっていきかかった。それぞれ考え方に違いはあるけれども、今はチームでやっていて共通しているところから次の肉付けをどうしていくのかを考えていきたい。例えば、つながり、拠点、人、人とのつながり、いろいろな人たちが入ってきてもいいのではないかというところまでは共通認識が得られたのではないかと思う。そして、この先の事業でも社会福祉協議会としての考えもいただいて、次回以降に期待したい。

(3) その他

事務局より、今後の予定について説明があった。

3. 閉会

(以上)